PR 〈企画・制作〉産経新聞社営業局

第３７回 大阪国際女子マラソン 特別対談

元女子マラソン選手
有森裕子氏

対談

奥村組 代表取締役社長
奥村太加典氏

想いを力に 大阪から世界へ

総合建設業の奥村組（大阪市）が今年、「大阪国際女子マラソン」（主催・日本陸上競技連盟、産経新聞社、サンケイスポーツ、関西テレビ放送）に協賛する。大阪から世界に羽ばたく女性アスリートを応援したいと話す奥村太加典社長と、五輪をはじめ世界の大舞台で活躍した有森裕子氏が熱い想いを語り合った。

大阪国際女子マラソン 1月28日（日）号砲

新春の「なにわ路」を舞台に女性アスリートが熱い闘いを繰り広げる国際マラソン大会。1982年に始まり今年で37回目を迎える。ジャカルタ2018アジア競技大会日本代表選手選考競技会等を兼ね、世界へ飛躍する大会でもある。号砲は1月28日（日）12時10分にヤンマースタジアム長居で。

ともに共通する感動と達成感

――社長自身、市民ランナーとして何度もフルマラソンを完走し、52歳のとき3時間2分38秒という自己記録を出されていますね。

有森●それは、すごいですね。

奥村●実は、2014年に「奈良マラソン」を走ったとき、終盤の上り坂で「ここよ！しっかり腕を振るのよ！」と、有森さんにお尻を叩かれたんです（笑）。

有森●そうでしたか、失礼しました（笑）。ランナーにとって一番苦しい所だと分かるので、つい応援に力が入ってしまうんです。

――そして今年、「大阪国際女子マラソン」に協賛されます。

奥村●私どもは1907年に奈良で創業しまして、1923年に大阪に本社を移して今日まで仕事をさせていただいてきました。ゆかりの深い大阪の大会に協賛させていただき、非常に光栄に思っています。

有森●こうした大会は、協賛や後援される方々がいらっしゃって成り立ちます。選手には、その後押しがあって世界を目指せるということを感じてほしいですね。

奥村●レースにかける選手の姿と、私たちが仕事に取り組む姿勢は重なる部分が多くあります。今回、協賛しようと思ったのは、その共感が大きかったのです。マラソンに出るには、地道な練習を重ねてスタートラインに立つまでのドラマがあり、そして、レース中にもさまざまなドラマが生まれます。そのドラマは、選手だけじゃなく、チームのサポートや、運営される方、沿道で応援される方がいて成り立ちます。私たちの仕事も、工事が着工するまでの取り組みがあり、工事が始まってからもさまざまなアクシデントに対応し、関係者の皆さんの応援に支えられて遂行できるのです。その感動と達成感は非常に共通すると思います。

現役引退後も、日本の陸上競技界のために尽力している有森さん。今年の大会、日本新記録に期待を寄せる

2010年からフルマラソン挑戦を続ける奥村社長。社員と駅伝に出場するなど、走ることでさまざまな人と交流を深めている

昨年の「第36回大阪国際女子マラソン」のスタート

自分を高め世界へ羽ばたく大会

走れることに誇りを感じた大阪

――「大阪国際女子マラソン」は、有森さんにとっても、女子の初マラソン日本最高記録を出されるなど特別な大会ですね。

有森●当時から、「大阪で勝てば世界に行ける」というくらい、私自身強い思い入れがあってデビュー戦は大阪と決めていました。実際、91年の大会で競り合ったカトリン・ドーレ選手をはじめ、尊敬できるランナー、目指すランナーに出会い、世界を見せてくれたのがこの大会で、私にとってこの大会がターニングポイントでした。

奥村●大阪の皆さんは、熱心な応援でも選手に力を与えていると感じますね。

有森●おっしゃる通り、ランナーは応援でモチベーションを上げたり、走りに気づきを得たりして、育ててもらう部分が大きいです。私は大阪のコースを走れることに誇りを感じていました。

――今回、協賛という形で女性アスリートを応援される奥村組さんは、普段から女性の活躍に取り組まれています。

奥村●当社も含め、日本建設業連合会では、建設現場で働く女性を「けんせつ小町」の愛称で応援し、全国の現場で頑張る皆さんに「けんせつ小町工事チーム」として登録していただいています。当社も自社の九州支店建て替え工事で女性所長をリーダーとするチーム「八幡ひまわり」を登録するなど、取り組みに力を入れています。建設業界も女性の活躍にもっとスポットライトがあたり、活動の場が広がってほしいですね。

有森●女性ならではのできることがあるので、それをどんどんプラスにしていっていただきたいです。そして、最終的には男性も女性も、ともに一人の人間として頑張る意識が大切だと思います。

――大会では若い選手の活躍も期待されますが、次代を担う若者にはどんなことを伝えたいですか。

有森●スポーツに関して言えば、モチベーションやメンタル面のベースとなる基礎の部分をしっかりとさせ、目的意識を持って取り組み、指導者も本人のやり抜く力を引き出し、育ててほしいです。今までできなかったことができるようになれるよう、練習の中で工夫をし、考え、苦しみ、挑戦することを積み重ねていってほしいと思います。

奥村●私は、自分たちの若いころも今の若い人たちも、本質的な部分は変わらないと思っています。他の人の良いところを見れば気づきを得るし、そこで努力すればどんどん伸びていくんです。情報があふれる現代において、適切に指導し導いてあげれば、皆さん良い方向に進んでいけるのではないでしょうか。今の若い人は多彩なスキルを身に付けていますから、将来的に有望だと思います。

新春の大阪で
世界への飛躍を
応援します

応援する人を元気にする走りを

――「人」を会社のシンボルマークのモチーフにしている奥村組さんにとって、今年は創業から「１１１（ひとひとひと）年」の節目の年です。これからのビジョンをお聞かせいただけますか。

奥村●大阪に本社を構え、社業を通じて社会貢献に取り組むことに変わりはありませんが、全国各地にバランスを取った形で事業を展開したいと考えています。土木工事と建築工事を両輪とする私たちの特徴を生かしながら、競争力を高める新たな技術開発にも積極的に取り組み、お客様から信頼される会社であり続けたいと思います。

有森●建設現場は周りが囲われているので、囲いの中を目にする機会はほとんどありません。でも、人の目に触れないそうした場所での取り組みや技術革新が、暮らしや社会を支えているんですね。奥村組さんが「人」を大切にして地道に取り組んでこられたことは、「人」が自分の力で一歩一歩進んでいくマラソンのイメージに、相通じるものを感じます。

――最後に今年の「大阪国際女子マラソン」に期待されることをお聞かせください。

有森●ランナーの皆さんには、応援してくれるすべての人を元気にする走りを期待します。それは、自分の生きる力を強くすることにもつながるので、走りを通して人や社会を元気にできることを楽しみながら、最高のパフォーマンスを発揮してほしいですね。

奥村●大阪のコースは比較的フラットで記録も出やすいので、ここから世界に飛躍する選手が出てくることを期待しています。大阪にゆかりのある選手にも頑張ってほしいですね。私たちも、皆さんが安心して競技に集中でき、応援する方々も含めて皆が盛り上がる大会になるよう、できる限り支援してまいります。

――ありがとうございました。

ありもり・ゆうこ／1966年岡山県生まれ。日本体育大学を卒業後、リクルート入社。1990年の大阪国際女子マラソンで初マラソン日本女子最高記録を樹立。バルセロナ五輪で銀メダル、アトランタ五輪で銅メダルを獲得。現在、日本陸上競技連盟理事等を務める。

おくむら・たかのり／1962年奈良県生まれ。中央大学理工学部土木学科卒業。1986年、奥村組入社、2001年、39歳で5代目社長に就任し、着実な成長を牽引している。マラソンにも挑戦を続け、52歳でフルマラソン3時間2分38秒の自己ベストを更新した。

記憶に残る工事

奥村組は、人々の記憶に残る工事に取り組んできた。戦後復興の機運が高まるなか、地元の人々の熱意に応え大阪のシンボル「二代目通天閣」の建設に着手。連日連夜の作業に延べ2万5千人を動員して1956年に竣工させた。完成後10年余り経営にも参加している。阪神・淡路大震災では、壊滅的被害で本格復旧には2年といわれたJR神戸線で、最も被害の大きい「JR六甲道駅」の復旧工事を担当。ジャッキアップ工法を駆使してわずか74日間で成し遂げ、早期の鉄道全線開通に大きく貢献した（1995年竣工）。

www.osaka-marathon.jp/

奥村組 OKUMURA CORPORATION **技術の奥村組**

1907（明治40）年に創業した奥村組は、「堅実経営」、「誠実施工」が信条。得意とするトンネル工事では、「シールド機」と呼ばれる筒状のトンネル掘削機で安全に地中を掘り進める「シールド工法」に強みを持つ。また、地震から建物を守る「免震技術」のパイオニアとして、免震建物や免震装置の普及に貢献するなど、111年にわたり土木・建築分野で独自の技術開発に取り組み、高い評価を得ている。